‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

63号 1993.2.16
文・編集・発行
恋怪子

LIVE: THE COOL BEAUTY 1993.2.6 高円寺屋根裏II

PHOTO BY K.K

62号に「ライブのたびにパワー、重量感、疾走感がぐんぐんと増してきている」と書いたけれど、この日は「ものすごい」といえるライブだった。完全につきぬけていた。最初から最後まで、ほとんど、ギター・ヴォーカルから目が離れなかった。歌はもちろんパワフルですごかったけれども、ギターがいままでいちばん、ゴリゴリ、ギーギーしていて圧倒的すごさ。おまけにベース・コーラスもブンブンときまっていて、さらにドラムもバシバシッ！それがみんな重なりあって、すきまが全くないヘヴィーな音になる。それほどすごいのに「DANCIN' IN THE STREET」のときなどロックンロールの気持ちよさも深いところにひびいている。

そういうTHE COOL BEAUTYに圧倒的にひきつけられているのに、同時にそういう自分を見ている覚醒している自分があって、観察し考察をしている。いくつものことが同時に起っている。耳は聴くことに徹し、目は見ることに徹し、心はそれらによってひきおこされた反応を続けることに徹し、頭は思考することに徹している。

こういう状態にぴったりとあてはまる言葉はあるのだろうか？人間のこういう体験、反応をあらわす言葉はあるのだろうか？

その言葉を見つける困難さは実はTHE COOL BEAUTYの音楽を表現する言葉を見つける困難さでもある。自分の知識、知覚を総動員してもむずかしい。音楽のジャンルのどこかに無理におしこめたとしても、そこからほとんど全部がはみ出すことは目に見えているし、第一に私にはそのジャンルすら見つけられない。

LIVE: THE STREET BEATS 1993.1.31 横浜 7TH AVENUE

1つ1つの歌にそれぞれの表情がなく、どの歌もみんな同じに聴こえる。歌と演奏が全部横一線に並んでいて、演奏が歌を輝かせない：歌と演奏がひとかたまりの団子のようにごろっとステージの上にあるだけ。

ライブハウスの前半分はギュウギュウ詰め、後ろ半分も結構ギッシリという状態でその熱気は伝わってくるのだけど、騒ぎに近い。あれだけ多勢の人たちがライブに来るというのは、それまでのTHE STREET BEATSのライブがすばらしかったからなのであって、そのときのライブがすばらしいということではない。だから多勢の人が来たということで、そのときのTHE STREET BEATSの力を測ってはならない。それは、きのうまでの（文字通り、きのう1月30日市川GIOのライブはすばらしかった）過去の力でしかないのである。

LIVE: THE COOL BEAUTY 1993.2.14 高円寺20000V

ギターの音がよくきこえないし、歌にもパワーがなくて、もどかしくて仕方がなかった。そこにもやもやとしているもやもやをぬいけて、すっきりしたくて仕方がなかった。ベース・コーラスの方が断然きまっていた。

LIVE: マンガンズ 1993.1.21 高円寺屋根裏II 1993.1.31 下北沢シェルター

ジミ・ヘンドリクスが流れるなか、客席の照明がふいと消え、マンガンズの4人がステージに現れる。時空を切り裂く音が鳴り、「屋根裏II」とか「シェルター」とかの名前のついている処が一瞬でその名前を失う。そこはこの世の何処でもない処になる。そして、歌が聴こえてくる。

言葉にできず つぎはぎだらけ
俺はいつからか 歌うたいさ （「イエイ・イエイ・イエイ」から）

なぜそんなに微笑（ほほえみ）をうかべるのかい
なぜそんなに手をさしのべるのかい
だって いつかは消えてなくなる
みんなみんな 消えてなくなる （「王様とおいら」から）

ゴミ袋をかぶって眠れば
あしたはきっとスモーキー・マウンテン（「スモーキー・マウンテン」から）

金網を越えて来いよ 逃げ出して来いよ
笑いたけりゃ笑うがいいさ 泣くよりゃいいさ
ひきちぎられたパンには 手をつけるんじゃない（「コンクリート・ジャングル」から）

金網を越えたむこうから歌が私たちを視ている。

金網の中で、コンクリート・ジャングルの中で、自分に見合った人生論で人生をまかない、混ざりものだらけの人生をどうにか破綻させずに生きている私たち。マンガンズの歌は、そんな私たちをみんなコンクリート・ジャングルから逃げ出させる。金網を越えたむこうに駆けていかせる。マンガンズの歌を歌詞のことばで考えることも可能だろう。それは人生論を読むくらいの効き目はあるだろう。詩にする仕事が完全になされている歌詞にはその力がある。けれどもマンガンズの歌というときには、そういうことばをいうのではない。軋んだ音色を放射する純正なギター。底深くうねりを鳴らすベース。幾種類もの爆発音を叩き出すドラム。そして、詩にする仕事が完全になされている歌詞が完全に覚醒して歌われているヴォーカルの声の響（ひびき）。それらの一つ一つから聴こえてくることば、それらが全部重なり合って一つになったものから聴こえてくることば、をいうのである。

マンガンズの歌を聴くということは、人生論を読むことでは知り得ない「生きることの意味を深く感知する」ことなのである。

音楽をやるってのは、音楽をただ放り出しておきゃいいってんじゃない。それじゃウンコしてるみたいだもん。ウンコはたしかに出すけどさ。演奏するってことは、ひとつの感情をとりあげて、それをきいている人が、読みとれて、理解できる、完成された、無駄のないなにかに変えることなんだ。自分のためだけうたってるんじゃないんだ。自分がどう感じてるかってことだけじゃたりない。自分の感じてることをつかんだら、次はあんたのボーカル・コード、あんたの楽器編成、あんたのアレンジをしてやって、聴衆が高められた感情をうみ出せるようにしなけりゃならないんだよ。―――― ジャニス・ジョプリン

（マンガンズのライブ評（ジャニス・ジョプリンのことばを除く）はミッドナイト・プレス13号に書いたものです。）

WORDS: 吉本隆明（「大衆文化現考」より）

ロック・グループの世界

ここ一、二年、すこしもの欲しげな眼つきで、サブ・ポエムともいうべき言葉の世界を漁ってきた。そこでは紋切り型の言葉づかいで、何とかして紋切り型でない感覚や意味を作ろうとしてるようにみえた。紋切り型を避けたいのなら、言葉をはじめから異化して使えばいい。そういった現代詩の常識は、この世界では通用しない。異化した言葉では、歌ったりおどったりできないからだ。しいていえば、サブ・ポエムの世界は紋切り型を定型にした定型詩の世界にいちばん近い気がする。紋切り型になかば媚びた作詞もあった。紋切り型の言葉づかいで、せいいっぱい高度なことをいおうとしているばあいもあった。せいいっぱいの言葉のたけが、ちょうど紋切り型になってしまったあの歌詞もあった。そして最後に、こちらが無意識に探している言葉に出会った。紋切り型を装いながらじつは、繊細な高度な世界を実現している。

もしもオイラが偉くなったら
偉くない奴とはつきあいたくない
たとえそいつが 古い友達でも
偉くない奴とは つきあいたくない
オイラがむかし世話になった奴でも
いくらいい奴でも つきあいたくない
だけどそいつがアレを持ってたら
俺は差別しない Oh つきあいたい

（RCサクセション「つ・き・あ・い・た・い」）

だれもがもっている嫌らしい俗物性にも、十分にあいさつをおくりながら、繊細なやわらかい曲線を描く反語（イロニー）になっている。ひとの心にひそむ劣悪な心情にメスをいれている。ひとびとは、じぶんだけの思いのなかで「アレ」という言葉の中身を、それぞれにふり当てる。この言葉はそれだけの力をもっている。質の高いソフトな反語（イロニー）の世界だとおもわれた。

オレは世間の嫌われものさ
ゴミ溜め ヘンタイ 落ちこぼれ
輝くために 居るんじゃないんだ
この世をドブに するためだ
I Like Body You
Like Money

善意に群がるアーチスト
生きているのが 楽しいか
正義に群がる 知識人
てめえの未来を 案じてな
I Like Body You
Like Money

（スターリン「Money」）

わたしがじぶんを「アーチスト」とか「知識人」だとすこしでも思ってるかぎり、このハードな反語（イロニー）は斬りかかる力がある。わたしは傷をうけながら、ハッとして初心を忘れた部分に、光が射しこんでくる仕掛けになっている。

こういった質の高い反語（イロニー）が産出される場所が、現在のロック・グループの世界だということに、わたしは強い関心をひかれた。こんな言葉がじっさい、ロック・バンドの演奏にのって、ボーカルに流れだすとき、どんなことが起こるのだろう。

先ごろ、RCサクセションの日本武道館コンサートで、この「つ・き・あ・い・た・い」が、レパートリーのひとつとして演奏され、唱われた。器楽の強烈なビート音と、舞台のうえをリズムの化身のように身体を律動させながら、緻密な無駄ひとつない曲線を描いて動きまわる忌野清志郎に悪依して、総立ちになったまま手拍子をうつ聴衆の、ウォーンという轟音のなかに、言葉はまったく没し去っていた。

言葉は、演者と聴衆のあいだの意伝が成り立つための呪言みたいなもので、前もって両者のあいだに了解されているようにおもわれた。その場面で実現されたものは、まったく別のものだった。繊細でやわらかな演者と聴衆の感依状態の音響と香りが、エロスを湛えていつまでも尽きなかった。言葉が実現した匂いとしなやかさは、場所の総体のなかに融けていた。反語（イロニー）としての意味も、また。スターリンのハードな反語（イロニー）の演奏舞台は、まだ体験していない。

吉本隆明「重層的な非決定へ」（大和書房）所収
「ロック・グループの世界は1983年3月（ちょうど10年前）新聞（共同通信社）に掲載されたもの。